

# 青い光で可視化 切除

## 取り残し減再発抑制

再発率を低減できるという。県立中央病院と富山大付属病院が導入しており、より正確な診断や再発抑止につながりそうだ。

(藤田愛夏)

ぼうこうがん治療で行う内視鏡手術で、ぼうこう内を青い光で照らし、がん細胞を見極めやすくする「光力学診断」が県内で広がっている。従来の手法と比べ、がん細胞を確実に切除し、

### 県立中央・富山大付属病院 ぼうこうがん治療に新手法



青色光を照らす瀬戸部長＝県立中央病院

ぼうこうがんは、がん細胞がぼうこうの筋肉の層に入っているかどうかで、治療法が変わる。入っていれば手術での全摘出などになり、入っていない初期であれば、尿道から内視鏡を入れてがんを切除する。

内視鏡を使う場合は従来、白色光でぼうこう内を照らし、画面で確認しながら電気メスでがんを切除する方法が一般的だった。ただ、県立中央病院泌尿器科

の瀬戸親部長によると、ぼうこうがんの病変は、正常な部分と見分けにくいことも多く、見逃しやすいという。そのため再発率が高く、手術後2年以内に6〜7割が再発するとされる。

光力学診断では、手術前に患者が蛍光物質を含んだ薬を服用。白色光ではなく特殊な青色光でぼうこう内を照らすと、がん細胞に取り込まれた蛍光物質が反応して病変部が赤色に発光す

るため、発見しやすい。がん細胞の取り残しが減ることで、再発を抑えることができる。公的医療保険制度が適用される。

同病院では多い年で年間100件以上の内視鏡手術を実施しており、光力学診断を5月に導入。11月末までに内視鏡を使った69件中46件で活用した。薬の副作用で血圧が下がりやすくなるため、一部の患者には実施できないが、今後は件数を増やしていく方針だ。

瀬戸部長は「これまでは医師の診断能力に頼っていたが、客観的な判断ができるようになった」と効果を語る。導入から間もないため、再発率を比較できるデータはないが、今後は大きく低下することが期待されるという。

富山大付属病院では2018年4月に採用。19〜20年は内視鏡を使った9割以上で光力学診断を実施した。池端良紀医師は「成果を発表できるのはもう少し先だが、腫瘍を見つけやすくなった」と手応えを示している。